

我輩の智識吸収法

大隈重信



大隈は耳学問だろうと言うものがある

日々幾十人の人に面接しているから、大隈は耳学問だろうというものがあるようだ。実際耳学問であるか、そうでないかということとは、まだ確しかと考えてみたことはない。また考えてみる必要もなかったが、とかく耳の方で聞いたのは、碌ろくな学問になっていないことは事実だ。

一体学問というものは、目でも耳でもいずれでも出来るはずのものに相違ない。学生は主として耳で学問をしている。彼の教場に於て講師の講義を聞くというのは、これこそ真の耳学問である。そこへ行くと我輩は、耳学問の出来ぬ方の性質だと思う。というのは、我輩は元来剛情で短気で、なかなか人の話などをうんうんと傾聴することをせぬ。どうも人の話

を聴いているのは間まだらしくて堪たまらぬ。それであるから対手あいてが誰でもかまわぬ、御先にご免をして、此方こちらからさっさと独りひとりで話し出すのである。

我輩は種々な方面の連中に会う機会が多い。まず日に随分種々な連中が見える。それだから耳学問をやりうと思えばそれは出来そうにもあるが、ところが今言つた通り我輩が人の話を聴かぬから耳からの学問はあまりない。しかし我輩は全く耳を使っておらぬというのではないが、ただ使うのは口ばかりだ。それでは耳の学問でもなければ、また目の学問でもなく、口の学問になつてしまう。まずこんな風であるから、我輩は考えてみた訳でもないが、耳からはあまり学問していいまいと思う。

しかし我輩は耳はあまり使っておらぬ

それで、海外からの新帰朝者の土産話みやげは、大いに耳学問になるだろうという人がある。それは此方こちらで注意して聴いてい
たならあるいは耳学問になるかも知れないが、我輩が土産話
も聴きはしない。土産話をしに来ると此方から逆に海外の話
を聴かしてやる。我輩の談が果して「当つて」いるかどうか
は知らぬが、構うことはない。洋行帰りの先生に海外の話を
聴かしてやる。こんな調子で御土産おみやげはとんと頂戴ちやうだいはせぬ。頂
戴しないどころではない、御土産おみやげに熨斗のしをつけて返してやる
のだ。

ところで若い時分はどうであつたかというに、若い時分から
我輩は剛情張りで、人の話などは聴かなかつたのである。な

んでも二十三、四の頃からは独りで先生気取りで盛んに講釈を聴かせて今日まで押し通して来たのだから、口は随分使っている。しかし耳はあまり使っておらぬ。

勿論暇さえあれば我輩は書物を読む

それなら書物は読んでおるか、もちろん勿論暇さえあれば書物を読む。暇さえあればその間酒でも飲んで騒ぐというようなこととはしない。それよりか読書をする。また我輩は園芸に興味をもっているから、暇があればまず庭園を歩き廻つて見る。而してしかなお暇が得らるれば、今度は読書をするという風になっている。実は智識をうまく活用して行くのである。

一体我輩のところへはあまり伶俐なものは来ぬ。それだか

ら我輩が独りで話してやるのだ。こういう風であるからなん
で人から智識などが得られるものか。よしまた如何いかに怜悯な
ものが来ても、我輩が耳を傾けぬから駄目である。人の話は
注意して聴いたらよい。学問にもなるだろうが、我輩の如き
短気な剛情者には耳学問は誠に不適當である。次に書物は読
むべきものであることについて一言しておこう。

社会と遠ざからぬ様に読書が必要である

時代の進運というものは冷酷極まるもので、自分と一緒に
駄けるだけの力のないものをば容赦もなく振棄ふりすててずんずん
変転してゆく。見給みたまえ、一時は相当の声望信用あつて世上に
持もて囃はやされた連中でもないつとはなく社会と遠ざかり、全然時勢

後れの骨董物となりさがりて、辛くも過去の惰力によりて旧位置を維持している者や、その惰力さえ尽き果てて、生きながら社会より埋葬せらるる如き悲境に沈淪するものの多いのは、畢竟この時代の進運に伴うべき気力と智識とが欠乏しているからである。

されば苟も社会の表面に立ちて活動せんと欲するものは、政治家であれ、実業家であれ、教育家であれ、絶えず時代の趨勢すうせいに着目して、その消長変遷に應ずるだけの新智識を収容するに努めねばならぬ。それは勿論読書が必要である。

しかしなほほど読書が必要だからといつても、實際社会に活動するものは繁劇多忙なる中に零細れいさいの余暇を尋ね出してやるのであるから、日夕書齋に閉じ籠こもつて、書籍と首つ引きをする専門学究の真似まねをする訳には行かぬ。彼は實際の必要不必

要に頓着とんちやくなく、純然たる研究的態度を以て隅から隅まで穿鑿せんさくするけれども、これは実際の必要を限度として大体の智識を得るに満足せねばならず、彼は何処どこまでも書籍を重位に置き、書籍の上に養われた眼目を以て社会を眺め渡さんとするけれども、これは事実を本位に置き、事実によつて教えられた経験の眼を以て書籍を看下みくださんとする双方のやり方が根本よりして違つておるのである。

現代の青年にはこの悪い習慣がある

厳格なる意味に於ていえば、この事実本位の読書法は無論むろん変則的であるかは知らぬけれども、実際の活智識を収容する上に於ては書籍本位のそれよりも有効である。

我輩等の育つた旧幕時代には、各藩とも御儒者おんじゆしやというものがあつて、読書講釈を専業とし、口癖のように修齋平治しゆうさいへいちを説いていたけれども、その言うところはただ書物の上の穿鑿せんさくにとどまり、毫ちゆうも實際に接触しなかつたので何の役にも立たず、儒者といえは呆痴者あほうの異名の如く思わせたものだが、今日の新学問は無論昔の儒学などと同日に論ずべきものでないとしても、学究先生が書籍本位の読書法は、ややもすると實際にかけ離れて、空疎迂遠くうそいゆゑんの弊へいに流れる傾きがある。

其そこ処こになると實際的活動家が社会の事実によりて得たる経験と修練とを基礎とし、その力によりて読書するのは直ただちに事実と思想、経験と理論とを連結せしめて活澆澆地かつぱうはつちの作用をなすことが出来る。ただこの種の人ひとが読書せざるを病とする。

一体我が国の青年には、至つて悪い習慣がある。彼等は学

校にいる間は随分勉強もすれば読書もするが、足一度学校を去りて實際社会に出ると、書籍などは一切束ねてしまつて振り向いて見ず、その癖不健全なる娯楽には随分憂身うきみを窺やつして、これがために身心の打ち壊れるを知らず、とかくする中うち、社会の進運に振捨てられて無用の長物となつてしまふが、いずれもそれほど六ヶ敷むっかしいことではない。新刊書なり新聞雑誌なり、時代の趨勢すうせいを知るものを備えて、業務の暇に新智識の吸収に努めたならどんなものであろうか。我輩は年老いたりといえども、まだまだ今の若いものなどに後れを取らぬつもりである。

我輩の智識吸収法 現代の青年にはこの悪い習慣がある

底本：「大隈重信演説談話集」岩波文庫、岩波書店

2016（平成 28）年 3 月 16 日第 1 刷発行

底本の親本：「大隈伯社會觀」文成社

1910（明治 43）年 10 月 20 日発行

初出：「成功 第十七卷第三号」

1909（明治 42）年 11 月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号-86）を、大振りにつくっています。

※〔 〕内の補足・注記は、編者による加筆です。

※本文冒頭の編者による解題は省略しました。

入力：フクポー

校正：門田裕志

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。